

我 と 仏 性

上 田 通 教

(一)

一般に仏教とは言つても我々は具体的に説明しようと思えば必ずやあまり多岐に及んだ仏教思想に当惑を感じるものであらう。

しかも今日までそれぞれの立場で教学研究に力を入れ仏教学としては幾分の業績を残してきたようである。しかし、そのような研究は今日よりは望まれそうもない。急いで仏教統一論ともいふべきものを（現代人の欲するものを）研究することが急務であらう。

特に今日の浄土教をみると人間軽視の感がないでもない。尊き人間性はたとえそれがどのような型にあらわれずともすなおに肯定すべきであらう。いたずらに「罪惡生死の凡夫」として未来往生のみを説くのは一考を要するのではないか。

勿論、人間の根本的な弱さは認める。しかし、神の僕

でないという人間の強さをここに体達しようとする宗教的努力はあつても不思議ではない。我々は生きている。

生まれてしまつて生きているのである。これ以上、卑屈に消極的に生きる必要はない。人間の根本的弱さ（パスカルの意味するもの）と人間の根本的強さ（仏への可能性）とは同次元のものではなからうか。そして私にはこの一方に偏する人間の特権を失ふことのないような生き方が仏教の教から与えられるような気がする。

このようなことから人間性の問題を強く推し立てて大乘涅槃經の仏性について一考を試みたいと思うのである。

(三)

そこで積極的仏教思想——特に無常觀等に対して——が、即ち常我的思想が信仰の主体たる衆生を通して、その理想たる法身仏に如何に帰一されるか、という問題が

起る。そこで如来と衆生の關係を明さねばならぬことになるが、

さて、仏陀觀の發達に伴い大乘仏教において、即ち日常に理想を実現し、日常を理想化し、理想を日常化しようとする理想精神の立場で、人間仏陀がなした菩提という理想を今度は主体の仏陀に替つて衆生が如来を理想とするのである。

既知のように、仏教の空哲学は何処までも自己の無我の原体験を根拠とし、これに結びつく自己の現実、自己関与の存在の無自性と主張するもので、大乘仏教は決して諸法の空について存在論的思弁による空を説くものではない。そしてこの場合、自己体験の事実、仏陀成道の事実を規準とし、理想の現実化の可能を信奉し、それになりきる時、我等は宗教的信念によつて無分別智の世界にあるといわれよう。その時、理想と現実、俗諦と真諦との間には根源における連続性が認められる。

さて如来と衆生との關係を寿命品によつてみると。純陀が、

「如来は久しく世に住したまはず、苦なる哉、世間空

虚なり」

といったのに対し、仏は、

「我、汝及び一切を憐愍するを以つて、是の故に今涅槃に入らんと欲す」。

と答える中に、浄土教的言葉をかきつていえば不取正覺の大慈大悲の攝取心が見られ、又、その如来は己に無量無辺阿僧祇劫において食身、煩惱身なく常身・金剛身であり衆生のための善法を生じ恒河にありて子を愛念する故、無為とも長寿ともいい、惡の衆生に恐懼なからんことを施すものであり、又、衆生において平等心ありといわれる。

さらに、如来は法であり、眞の解脱であり、廣大であり、最上である。又、不可決、不可見、一味清淨、到彼岸にして、我我所を離れ因縁を抜くといわれ、又、現病品には、

「我、今、背痛む。汝等、当に大衆の為に法を説くべし。」

「二つの因縁有らば、即ち、病苦なし。何をか二となす。一に一切衆生を憐憫し、二に病者に医薬を給施す。」

といい、聖行品第十九の中に、

「如来、虚空乃与仏性と差別あることなく是集性に非ず、陰因に非ず、可断相に非ずして是の故に実である。」

「虚空は即ち是真実、仏性は真実、如来は苦に非ず、乃至対に非ず。」

「如来是の如く真実に我有り。」

とあり、高貴徳王菩薩品には、……

「如来は不定なり……如来は人に非ず、何を以つての故に、如来は久しく無量劫の中において人有を離るるが故に。亦非人に非ず、迦毘羅城に生るるが故に……如来は衆生に非ず、久しく衆生性を遠離するが故に。

……或る時に衆生相を演説するが故に、是の故に如来は非衆生に非ず……如来は心に非ず、虚空相の故に、亦非心に非ず、十力心法有るが故に、他の衆生心を知るが故に、……云々……」

といい、迦葉品には非如来を明して、

「非如来とは一闍提より壁支仏に至るを謂う。是の如き一闍提より壁支仏に至るを破せんが為に是を如来と名く。」

といっている。

以上、如来と衆生について見てきたが、一切衆生悉有仏性といわれる衆生は「天眼あることなし。煩惱の中にありて而も自ら如来性有るを見ず。」といわれているが、悟りの世界にいるには唯如来よりの慈悲のみであろうか。人間仏陀は真理を発見し、如来と同次元になり得た。仏陀の内省はそのものにおいて、絶対的自由を勝ち得たと思われる。仏陀以外の衆生も（能動的に）人間の數知的本質を発揮出来ないものであろうか。

シェリングはその著「人間的自由の本質」の中で、
「數知的存在者の行為は、その内面から同一性（Identität）の法則に従つてのみ、また、絶対的必然性を以つてのみ結果してゐることが出来る。そしてこの絶対的必然性のみが絶対的自由である。」
といひ、

「人間の本質は本質的には彼自身の行なので必然と自由は唯一本質として融合する。……人間は根源的創造に於ては一つの未決定なる存在者である。人間は時間の中に生まれるのであるが、然も創造の元初の内へ創

り出されているのである。時間の中なる彼の生を限定する行は自身時間には属せずして永遠に属する」と

といっているように、人間衆生の本質的行がなされる時には、時間的経過の中になげこまれたかよい存在者としての人間は、それがもつ同一性のもとに空間的に永遠の相に絶対的一致を見ることが出来るであろう。

常に創造の元初にある人間は空間的なものであり、永遠の相であり、常住であり、仏性有るものであろう。

(三)

さて、一切衆生に仏性有るという。仏性有るというのはどのようなことか。仏性の存在が問題になるわけであるがここでは我と仏性についてみてみようと思う。

如来性品（口訳一切経 初二十卷 一六二頁）に、

「迦葉白仏言。世尊、二十五有、有我不耶。仏言。善

男子 我者即是如来藏義。一切衆生悉有仏性。即是我義。従本已来当為無煩惱所覆。是故衆生、不能得見」

とあり、即ち、一切迷界の存在の中に、我といわねべき意義は如来藏なる仏性を一切衆生が悉く具えていることである。衆生の本質たる仏性は永遠の生命であるから独

尊の意義を有し、又眞の自由を備えたものであるから我といわれるのであつて一切の執着と固結とを去つたものである。

一方、仏性とは不断といい、中道の種子であり、有的虚空であり、二重の否定を通しての無我と同時に我なるものであり、それは眞であり如来である。そしてこの如来は衆生あつての仏の開顯であり、衆生が如来へ帰入されると同次元に衆生の側に仏を見る可能性である。だからして、中道でもあり、第一義空でもある。この第一義空は大乗仏教の根本義であり、無執着の状態をいう。

(四)

さて、理想は理想として常にある位置を保つと同時に、常に我々の世界に引き下げようとする実際の活動の対称であることが望ましい。

大乗涅槃經は諸經の中にあつて醍醐といわれ、最高であり常楽我浄を積極的にといた。

本經の中心は仏性であり、その仏性は常に衆生において眺められた。しかも衆生と如来は主体と客体でなく己得以前の仏性の中にあるのである。我々衆生の中には内

在的であると同時に超越的な永遠の自由な生命があり、それが呼ばれることが許されるならば大我であり、常、楽、淨なるものであらう。しかもこの大我は既に形があつての永久的、絶対的自由の本体でなくして最高の

Sollenとして、又主体なき（神意なき）Werdenとして如来（ありのまま）であらう。しかも Chaos 的なものではなくして Logos 的なものであり、断ずることの出来ぬものであり、これが仏性ではなからうか。これは目的なき合目的なるものへの精神の向上であるかもしれぬ。人生の帰趣として生れ出された人間が求めずにおかない人間からの救い、しかも常に空間になげだされている人間、その人間が内省と外延によつて流れの中に瞬間的に広大なもの、それが仏性ではなからうか。

（未 完）

— 本論文は紙数の都合上、論理の飛躍、説明の不十分なる点が多くして読者に迷惑をかける事をおわびいたします。 —